

英国病理学会 (The Annual meeting of the Pathological Society of Great Britain and Ireland 2023: Liverpool 2023) 派遣報告書

愛知医科大学医学部 病理診断学講座
都築豊徳

2023年6月27日から29日にLiverpoolで開催されたPathological Society of Great Britain and Ireland 総会 (BDIAP との共同開催) に参加する機会を得ましたので、ここに参加内容を報告させていただきます。Liverpool 到着時のイメージはずいぶんとこじんまりした街であると感じました。歩いていくと非常に床屋の数が多く、Beatles の名曲 Penny lane の中で床屋が最初に登場するのは偶然ではないと感じました (Penny lane でなくとも、Liverpool では床屋のシーンから歌のイントロが始まりそうです)。学会前日に行われた会長招宴に参加させて頂きました。日本とはかなり異なり、ほとんど平服で臨席しており、かなりリラックスした雰囲気でした。



学会会場は Liverpool 大学構内の校舎を一つ借りた感じで行われました。学会初日に会場に出かけたところ、案内がかなり大まかで迷ってしまいました。Liverpool 大学の図書館の館員の方に場所を聞いたところ、“そんな学会が行われている自体知らない！”と言われ、途方に暮れてしまいました。その後、その館員を中心に複数名の方々に色々と調べて頂き、最終的に場所が分かりました (本当にありがとうございました！)。会場の入り口が小さく、かなりわかりにくかったです。

📷 学会会場入り口の写真

英国以外の著名な病理医が複数招聘されており、非常に高度な内容が討議された。いくつかの講演を直接聞いてみたが、それぞれが非常に濃密な内容で大変参考になった。native しかわからない冗談があり、いつもながら困惑してしまった。代表例が Robert Young 先生の講演冒頭で“私はアイリッシュだし、英国を出てからボストンに50年以上住んでいるので、アクセントが分かりにくいかもしれません。”というところ会場が爆笑となりました。独特の方言を使ったと思われるが、高度な内容についていくことができませんでした。学会自体は非常にコンパクトでポスターの数もそれほど多くなく、日本病理学会秋期特別総会よりも規模が小さい印象がありました。ポスターをすべて見たのですが、かなり高度な発

表から症例報告まで様々でした。座長がポスターを周回して、総合討論をすることにプログラム上はなっていましたが、どのタイミングで行っているのかよくわかりませんでした。



会場受付



ポスター風景

会場では junior として慶応大学 紅林泰先生、大阪大学 田原紳一郎先生のお二人が参加、口演をされました。お二人の発表を拝聴しましたが、非常に高度な内容を含んだ発表でした。会場から多数の質問がありましたが、適切な回答をされており、日本病理学会の地位向上に貢献して頂けたと思います。この場を借りて、感謝を申し上げたいと思います。



左から都築、Arends 会長、紅林先生、田原先生



左から都築、Coupland 教授、紅林先生、田原先生

英国病理学会の会長である Arends 教授とは WHO の会議で何度かお会いしており、5 月にも会議で御一緒したところでもあり、非常に打ち解けた会話ができました。非常に気さくな人柄であるところもあり、日英の関係強化には非常に良いと感じました。



日本での宿題講演に相当する講演が 2 演題あり、それぞれが英国の病理学の発展に寄与された方の名前が付けられていました。BDIAP Kristin Henry Lecture として、旧知の Berney 教授が前立腺癌の話をされました。会長招宴の場で彼から発表スライドに“組織標本スライドは 1 枚も使わない”と聞いてはいましたが、その通りで驚きました。

📧 Berney 教授の発表

もう一つは **Pathological Society Doniach Lecture** として、肝臓病理で著名な **Burt** 教授の講演を拝聴できたのはまさに僥倖でした。

本学会のプログラムで特筆すべきは、若手向きのセッションが多数作られており、若手の発表に対して、指導的立場の病理医が色々と助言を与える内容でした。英国での病理医数は決して多くはないが、非常に高度なレベルが維持されている理由の一端を垣間見た気がしました。日本病理学会でも検討する価値があるかもしれないと感じました。

最終日は泌尿器病理のセッションが組まれており、コロナウイルス蔓延のために会うことができなかった多数の泌尿器病理医と直接会うことができたのは大変幸運でした。



座長の Coupland 教授と都築



都築の発表。前立腺癌の予後因子を解説

また、最終日の昼に **International session** として、“**Recent Advances in Prostate Cancer Pathology in Japan**” という演題名で発表する機会を頂きました。座長として **Liverpool** 大学教授で、今回の学会開催に尽力された **Coupland** 教授に司会をして頂きました。日本における前立腺癌病理の研究内容を披露させて頂くことができ、現在の病理診断の問題点、日本人独特の特徴、最後に人工知能に関する話をさせて頂きました。

今回の学会参加を通じて、日本病理学会のプレゼンスを示すことができたことは幸いです。また、英国の内情を伺うことができたことも非常に幸運でした。今後も日英交換事業を続けることにより、両国間の結びつきを強める重要性を改めて認識しました。

今回の事業に当たり、尽力して頂いた日本病理学会、九州大学魚返様並びに英国病理学会関係各位に深く感謝申し上げます。